

## [調査研究]

## 阿部次郎の東北帝国大学赴任と狩野亨吉

曾根原 理

## 1. 阿部次郎と狩野亨吉

阿部次郎（1883-1959）は大正期を代表する文化人として知られている<sup>1</sup>。彼は山形県酒田市の旧家に、8人兄弟の次男として生まれ、第一高等学校在学中に斎藤茂吉、安倍能成、岩波茂雄などと交友を結んだ。東京帝国大学哲学科を卒業後、作品批評等により漱石に認められ、漱石門下の小宮豊隆らと親しんだ。1914年（大正3）には『三太郎の日記』を刊行し、独自の理想主義が広く評判を呼んだ<sup>2</sup>。やがてそれは「人格主義」へと展開し、大正教養主義の代表的存在となった。

さらにその後、東北帝国大学に法文学部が設置された際に、阿部は創設スタッフとして学風の確立に大きく寄与した。また日本文化の研究に業績をあげ、1954年（昭和29）には私財を投じて阿部日本文化研究所を設立した<sup>3</sup>。著作は『阿部次郎全集』全17巻（角川書店、1960-66年）にまとめられている。

現在、東北大学附属図書館には、阿部の恩師にあたる狩野亨吉、夏目漱石、ラファエル・フォン・ケーベルに加え、友人の小宮豊隆といった面々の旧蔵書が保管されている。ケーベル（1848-1923）は阿部が東京帝国大学在学中、もっとも深く師事した教授である<sup>4</sup>。漱石（1867-1916）に対して阿部は、接した頻度は多くないものの、一定の評価を受け、自らもそれを自負して

いた<sup>5</sup>。小宮（1884-1966）と阿部は、漱石門下の盟友として、東北帝国大学の文科系を牽引した親友といえるだろう<sup>6</sup>。そうした人々に比べ、第一高等学校在学中の恩師である狩野について、阿部がどのように接していたか知られることは少ない。本稿では阿部と狩野亨吉との関係に注目し、特に両者の内的接点を検討したい。

阿部次郎の日記（以下「日記」）<sup>7</sup>を一覧するなら、狩野亨吉に関して表1（次頁）の記事を見つけることができる。

日記に狩野の名が見られることは驚くほど少なく、大きく二つの事件に限られる。一つは漱石逝去時で、阿部は狩野の視線を強く意識している。実際の狩野の態度がどうであったかは知りようもないが、多くの人々が集まった中で、なぜか狩野のみの名を挙げ記す行為は、阿部が狩野の存在を強く意識していたことを示す。もう一つは狩野の逝去時である。阿部自身の言では、（わざわざでなく）たまたま在京していたため遺骸を拝み、葬儀に列席することなく仙台に戻り、冷淡かと思えばしかし三日かけて15句を作って追悼している。そこには、清貧に生を終えた狩野<sup>8</sup>に対する、ストレートではない敬意が窺えるように思われる。

このように、独特の敬意は感じられるものの、狩野が日記に登場する回数はごく少なく、両者が深い関係だったとまでは言い切れない<sup>9</sup>。狩野とほぼ同世代の中

1 阿部次郎の基本的な伝記として、新関岳雄『光と影』（三省堂、1969年）がある。大森一彦「阿部次郎参考書誌」（『文献探索』26、2014年）は、阿部の著作、年譜、書評などの情報を収録している。

2 竹内洋『教養派知識人の運命』（筑摩書房、2018年）は「重版数の変化」を手がかりに同書の需要の時代的变化を探っている（pp.251-255）。

3 阿部の死後、1963年（昭和38）に東北大学文学部に寄贈され附属日本文化研究施設が設立されたが、1996年（平成8）に東北大学東北アジア研究センターに改組され、現在蔵書は附属図書館阿部文庫、建物は文学部附属阿部次郎記念館として残され、美術品は仙台市博物館に収められている。

4 日記の1902年（明治35）1月6日条には、「…ケーベル博士「宗教トハ何ゾヤ」ヲ読み、我思ヘルコトト合セルモノ多ク快イフバカリナシ」とあり、一高生時代から傾倒していたことが分かる。領事館にケーベルを訪問した記事も見られる（1919年（大正8）5月30日条）。なお「叱られた話」（『阿部次郎全集』第7巻所収）および「ケーベル先生の言葉」（同第10巻所収）も参照。

5 たとえば「夏目先生の談話」（『阿部次郎全集』第7巻、角川書店、1961年）参照。その中で阿部は、小宮豊隆に「（夏目）先生は今の若い者で思想を取り扱ふ資格のある者は次郎位のものだ」と伝えられ感激したことを自ら記す。なお「夏目先生的こと」（『阿部次郎全集』第13巻所収）も参照。

6 たとえば小宮豊隆「阿部次郎を語る」（一）～（三）（『阿部次郎全集』月報5-7、1961年）参照。

7 『阿部次郎全集』第14巻（角川書店、1962年）および同15巻（同、1963年）所収。大平千枝子執筆の「解説」によれば、現存の日記は「阿部自身の整理の手を、何度かのがれて来たもので」、「意識的に破棄された」分を除く性質を持つという。

8 連作の「亨吉仏」「静かに過ぐる」「事もなげなる」「閑かな仏」などの表現に慈愛や穏やかさ、「蒲団は薄き」「安んぜし貧」「六畳に」などに清貧さが読み取られる。

9 『阿部次郎全集』第16巻（角川書店、1963年）は阿部次郎の書簡を収録するが、狩野亨吉への手紙は一通も含まれない（「書簡索引」『阿部次郎全集』第17巻所収）。一方、狩野の身辺資料（東京大学駒場図書館所蔵）にも現時点では、阿部の書簡等は発見されていないようだ（整理担当者のご教示による）。

表1 阿部次郎日記に登場する狩野亨吉

年(和暦) 月日	記事	全集巻 - 頁
1916年(大正5) 12月9日	天気陰寒、／夏日先生死す、一寸帰宅中にて死目に逢はず、雀室内に飛び入れる話、／通夜、雪とまがふ月夜、死面。／狩野先生の注意の眼を感じず、／先生の書すての反古の騒ぎ。	14-175 上
1916年(大正5) 12月28日	天気よし、風甚し、午後一時雑司ヶ谷夏日先生埋骨式、狩野先生の余を注目するを感じず、／帰りに和辻と中と寄り八時頃まで話して帰る、	14-176 下
1917年(大正6) 2月9日	広島の人竹河琢爾来訪、早稲田の哲学科に入ることの相談を受く。同情を以て相談にのる、／夜漱石庵九日会、中村是公、狩野亨吉、戸川秋骨等の諸先輩あり、十一時頃まで雑談、帰途岩波に美学を今月一杯待つてくれるやうに云ふ。	14-182 上
1942年(昭和17) 12月22日	9/12-4 松風了／岩波に帰って茅野に電話、城戸(幡)君にあふ、／宵銀座散歩、不二家ランチ暗くなりまづくなる一帰りに堤君より電話、狩野先生訃報	15-112 上
1942年(昭和17) 12月23日	朝狩野先生弔問、帰って田辺(元)小倉(金)両君と落合ふ、学士会にて中食、岩波と立話せるのみにて出発、夜八時過帰仙、みち子まり子既に帰れる後なり、	15-112 下
1942年(昭和17) 12月25日	狩野先生の葬儀を偲びて供養の句を作り線香をあぐ、／妻発熱終日床中／川村マッサージ茶の間にて	15-112 下
1942年(昭和17) 12月26日	供養続く／妻押して起き邪魔をする／方々に振替を出す、	15-112 下
1942年(昭和17) 12月27日	供養三日目／連歌筆記加筆終夜／酷寒／妻検温器を毀す、	15-112 下
1942年(昭和17) 12月27日	昭和十七年十二月二十一日深夜狩野亨吉先生長逝、偶々在京して二十三日午前御遺骸を拝す 幣白き柵の蔭や小玄関／陋巷に冬暖かく仏かな／御仏の蒲団は薄き冬日かな／面上の中皺じみて冬仏／をろがむや亨吉仏の髭の霜／面差に紅味残りて仏かな／哭すべく静かに過ぐる仏なる／冬されに事もなげなる仏かな／なるやうになりて閑かな仏かな／安んぜし貧は昨日の仏かな／群材を育てゝ今は仏かな／六畳に客四五人と仏かな／微塵なき本来仏に頂礼す／墓地裏に老隠逝きぬありのまゝ／老鶴は去りて花なき柵かな	15-147 上

でも、漱石はもちろん、大塚保治(1869-1931)<sup>10</sup>に比べても親密さが感じ取れないように思われる。

ただし、そのように断定するのが躊躇される材料も無いわけではない。なぜなら阿部の主著の一つである『人格主義』には、次の文章が見られるからである。

…丁度十余年前に、私が第一高等学校の生徒としてゐた時分のことである。当時の校長は△△△△先生であつたが、その時分には高等商業との対校レースの廃止問題や皆寄宿舎制度の問題など、学校には種々の問題があつた。茶話会の時などによく生徒や卒業生が演壇に立つて、△△先生を前に置いて、先生の方針にドシ〜反対する、さうすると

先生は泰然として聴いてをられて、さうして後に先生の意見をハツキリ言つてきかされたが、あの△△先生の態度は非常に美しい態度として、今でも私の記憶してゐるところである。私は今、総長(曾根原注：山川健次郎東大総長)の態度のよいか悪いかを論じる場合には、仮に△△先生を総長の位置に置いて、さうして△△先生の前において言つても差しつかへないやうな率直な云ひ方をするやうに努力して見ようと思ふ。もし私の言ひ方が△△先生に対する敬意をも失ふやうな、軽薄な、悪意のあるものであるならば、それは私が悪いのである。しかしもし幸いに△△先生に対する敬意を

10 漱石の友人で、東京帝国大学教授(美学専攻)。阿部がしばしば大塚に親しんだ様子は、日記の1917年(大正6)5月3日条、1920年(大正9)10月9日条、1921年(大正10)11月25日条などに見える。阿部が東北帝国大学赴任を決める際にも、相

談し「よからう」と背中を押したのは「大塚先生」であつた(日記1921年(大正10)5月22日条)。なお「大塚保治先生のこと」(『阿部次郎全集』第10巻所収)も参照。

失はないやうな態度で私がお話が出来るとして、それでもなほ忿る人があるならば、それは憤る人の方が悪いのである。この点の判断については、私は△△先生の第一高等学校長としての態度を標準として、可否ともにそれによつて判断されるに委せようと思ふ、さうしてこの標準にもかなはなかつたらそのとき私はあやまらうと思ふ。<sup>11</sup>

引用文の伏字部分については、簡単に解明できる。阿部次郎の第一高等学校在学期間は1901年（明治34）9月から1904年（同37）8月であるが、その時期の第一高等学校長は一名しかいない。1898年11月から1906年7月まで在任した狩野亨吉である。したがって「△△」には狩野、「△△△△」は狩野亨吉が入ることになる。茶話会場の<sup>12</sup>での狩野校長の態度を「非常に美しい」と感じ、自らも「敬意を失はないやうな」「率直な云ひ方」を目指すというのであるから、阿部にとって狩野が目標となる対象であったことは疑いのないところであろう。比較的親しく接した漱石やケーベル、大塚保治などとは異なり、阿部にとって狩野は、より人生の指標として受容されていたのではない。

## 2. 森戸事件と阿部次郎

前記の引用文は、『人格主義』全体の中でも「余論一応用」の「一、大学の独立と社会理想としてのアナーキズム」の一部である。その方向性について、冒頭部分から確認しよう。

私が今日こゝに出てきたのは、強ひて頼まれたからではなくて、自分でその義務を感じたからである。森戸君の事件は私にこのことを云ふ義務を感じさせた。尤もいまこゝで主なる問題にしようと思ふのは、森戸君の事件そのものではなくて、森戸君の事件から引き出された一般的な問題—大学に関係する一般的な重大な問題を引き出すために、まづ具体的に森戸君の論文のことにについて考へて見たいと思ふ。<sup>13</sup>

『人格主義』は1922年（大正11）6月に岩波書店から刊行されたが、その本論は前年に『人格主義の思潮』として発行されている（非売品）。同書を改めて刊行す

る際に付加された「余論」の一部が該当部分であるが、これはこれで1920年（大正9）2月の講演筆記である（末尾に注記あり、日記を参照するなら、2月27日の講演内容と断定しても良いように思われる）。

阿部が狩野に言及した『人格主義』の一文は、実は森戸事件に対する阿部の主張と連動していた。森戸事件とは言うまでもなく、戦前の著名な思想弾圧事件である。いま事典的に説明するなら、次のようになる。

東京帝国大学経済学部助教授森戸辰男の筆禍事件。森戸が、1920年（大正9）1月1日付けの同学部内経済学研究会機関誌『経済学研究』第1巻第1号（実際は前年12月下旬に出版）に発表した「クロボトキンの社会思想の研究」が、上杉慎吉教授を指導者とする興国同志会の策動により危険思想と攻撃され、政府もこれを問題として、1月10日森戸は休職処分を受けた。14日には森戸と編集署名人の同学部助教授大内兵衛が起訴された。3月3日の東京地裁、6月29日の東京控訴院の有罪判決のあと、10月22日大審院で上告棄却の判決が下された。新聞紙法第42条朝憲案乱罪により森戸は禁錮3か月・罰金70円、大内は禁錮1か月（執行猶予1年）・罰金20円に処され、両人ともに東京帝大を失職し、森戸は11月4日に下獄した。学内の森戸擁護の声は小さかったが、言論人や黎明会などを中心に、世論は学問思想の自由に対する弾圧であるとして反対した。<sup>14</sup>

阿部はどのような経緯で森戸論文を論ずるに至ったのだろうか。前後する時期の日記に登場する、森戸関連記事を集めたのが表2（次頁）である。

阿部は事件の約1年半前に森戸と初めて対面しているが、日記ではその後の交流の様子を確認できない。ただし阿部は、1918年（大正7）末に吉野作造らを中心とする進歩的知識人で結成された黎明会に請われて入会しており、同会会員であった森戸とは立場を共有すること少なくなかっただろう。

1920年（大正9）1月に事件が周知のものとすると、阿部は実際に森戸論文を読み「これで休職にしたり起

11 『阿部次郎全集』第6巻（角川書店、1961年）pp.182-183。すでに鈴木正「半世紀前の大学問題」（1969年）が注目している（同『狩野亨吉の思想』平凡社ライブラリー増補版、2002年、p.204）。青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』（明治書院、1974年、pp.174-175）では伏字でなく「狩野」等で表示している。

12 日記の1902年（明治35）10月31日条には「夜、第一学期全

寮ノ茶話会アリ、近来校事脳ヲ刺激スルコト多シ」とある。当時の茶話会の状況は注2 竹内著書 pp.90-91 も参照。

13 『阿部次郎全集』第6巻（角川書店、1961年）p.177。

14 主として『日本大百科全書』小学館による。（<https://kotobank.jp/word/森戸事件-142907>、2020年1月15日閲覧）



表2 阿部次郎日記の森戸辰男関係記事

年(和暦) 月日	記事	全集巻-頁
1918年(大正7) 8月15日	講習会了, 上田に来てゐる石原と打合せて午後二時小諸発の汽車にて軽井沢へ行く, 神津利三郎同行, 岡村千馬太もゐる, 森戸法学士と初対面, 一同にて峠まで行きゆつくり遊んで日暮停車場前油屋へ投宿, 市河三喜ともあふ。／月見草の美しさ。	14-248 上
1920年(大正9) 1月14日	終日 klassische Wapulgisnacht (曾根原注: ゲーテ『ファウスト 第二部』の場面) をよみて講義の草稿をつくる。／午前, 岩波の小僧検印をとり来り後間もなく岩波自身出版のことで相談に来る。／中谷氏注射に来てくれず, 古屋君に依頼の葉書をかく。／森戸君休職の新聞を見る。	14-323 上下
1920年(大正9) 1月22日	午前三田, 帰りに和辻に寄り暫く話してゐるうちに能成も来りて森戸君の話などを, 和辻より問題の論文が出てゐる雑誌を借り安倍と二人にて五時近く辞去, 茅野の子供インフルエンザにて悪き由をきゝて二人にて玄関まで見舞に行き, 途々岩波の話をきく。帰りても茅野のこと頭にひつかゝりて心静かならず, 西田先生より「意識の問題」を送つてくれる	14-324 下
1920年(大正9) 1月23日	昨夜よく眠られず今日は何をする気もなし, 西田さんに礼状, 大須賀に弔状を書けるのみ。午後森戸君の論文をよんでこれで休職にしたり起訴したりするのは理由がないと思ふ, 黎明会で黙つてゐるのは卑怯だと思ふ。夜吉野氏に此意味で手紙を書く。	14-325 上
1920年(大正9) 1月28日	午前落合来訪, 九鬼三さんに紹介状をくれよといふ。岩波も来訪, 森戸の件につき裁判長井野の心証を動かす為鳩山に逢ふことをすゝむ。承知して午後岩波まで出向, 電話にて鳩山の在所をきゝ合すれど不明, やむを得ず岩波の本を四五冊貰ひ, 文房堂で紙など買ひて帰る。夜心落付かず, 漸く明日の講義の準備をごまかす。	14-325 下
1920年(大正9) 2月10日	午前午後目白, 土屋しげ子の相談をきいて四時となる。／帰宅夕食を了へて神田青年会館の黎明会講演会に行く, 満員にして而も静肅なるに驚く。佐々木惣一, 福田徳三, 木村久一, 大山郁夫, 富永徳麿其他にあふ。桑木吉野五来森戸三淵氏等にも。十時過閉会, 白葡萄酒などを買つて帰る。	14-327 上
1920年(大正9) 2月19日	午前三田行, 田町まで乗越, 車掌の横着にて倍額をとらる, 日暮までかゝりて怒漸くしづまる。帰りに和辻によりて五時までみて帰つてきたら双葉から和子が入学出来なかつた由の通知が来てゐる, 夜大学新人会の河西太一郎講演をたのみに来る, 森戸君のことを論ずるつもりにて引受く, 十一時まで話して帰る。	14-328 上
1920年(大正9) 2月27日	午後家を出で大学行, 美学研究室にかりてゐた本を返し, 四時より三十二番にて「大学の独立」について講演二時間余, 直ちに日本橋末広に行きて白根竹介渡辺得男及岩波と会食す。	14-329 上
1920年(大正9) 7月18日	晴天, 松村の招待にて星ヶ岡茶寮に行き工藤, 鳩山, 井野(英), 上野, 岩波及び南画家五六と会す。井野鳩山と森戸事件の議論をしたりなどして日暮まで遊び, 夜又竹永楽で飲んで十時帰途につく。久しぶりにて旧友と会せるなり。従つて日課休み。	14-343 上
1920年(大正9) 11月4日	午前慶応, 今日帰りに和辻に寄らず丸善に行きてスプリングの美術史やマイヤーのゲーテや其他数書を買ひ, 三時頃帰宅, 妻みち子千枝子を連れて東京医学専門学校に健康診断をして貰ひに行く。異状なけれども腺病質の由なれば用心が肝要なりと思ふ。／来書一博文館編集部, 森戸辰男(下獄の挨拶), 加藤儀蔵, 丸善広告	14-359 上
1921年(大正10) 2月23日	午前山本実彦来訪, 誘はれて帝国ホテルの森戸送別会に出で五六子にあふ, 帰りに銀座で小宮とあひ銀座通を歩き五時ステーションホテルの鳩山中村送別会に出づ, 久ぶりにて杉村陽太郎其他にあふ, 鳩山酔ひて二次会を新橋の大村でやつて終電車で帰宅。鳩山から相談を受けたることあり。	14-392 下

訴したりするのは理由がない」「黎明会で黙つてゐるのは卑怯だ」と思い詰める。書簡で吉野作造に訴える<sup>15</sup>(29日返信)だけでなく、自らも裁判長に働きかけるため行動を起こす。こうした状況の中で、森戸擁護の論陣を張る際に思い起こされたのが、一高校長時代の狩野亨吉であった。

### 3. 仙台への道

阿部は『人格主義』「余論一」で、アナキズムやコミュニズムについて、「実行的過激性」を主張しない限り、「すべての道徳や宗教はほとんど例外なしにアナキスト・コミュニズムの理想をわれわれに教へるもの」と説き、「もしこの理想が危険であるならば、人格の自由と意志の自立を説く倫理学はアナキズムとして危険」「愛をもつて自己の所有を隣人に与ふべきことを説く宗教は、コミュニズムとして危険」などと説く<sup>16</sup>。そして森戸論文は、「実行手段としての暴力には賛成しない」立場であることを強調する<sup>17</sup>。結論として阿部は、「「社会理想」としてのアナキスト・コミュニズムが、理想そのものとしてはいかなる点においても国家にとつて危険なものでない」以上「この理想を信ずるがゆゑにその教授の一人を処分することは、断じて大学のあやまちである」「もしこの理想のゆゑにその人を大学に置くべからずとすれば、大学は須く倫理学の講座を閉じ、宗教哲学の講座を廃し、儒学の研究を禁じ—さうして要するに文学部を閉鎖すべきである。」<sup>18</sup>と述べる。

以上のように阿部は、森戸を擁護する。それをいったん確認した上で、ここでさらに注意したいのは、阿部が国家と大学の関係についても言及している点である。まず「国家はその理想的使命を果すために真理に従ふことが何よりも大切である。したがつて大学における真理の研究は国家に取つて非常に重大な事件である。国家は極力大学の独立を重んじなくてはならない」等を挙げる<sup>19</sup>。さらに大学のとるべき道として、真理を

愛する人が互いに尊重しあうという点に加え、教授会の強化を打ち出していることが注目される。「少なくともその学部に関係することは教授会の承諾を得なければ総長の一存では何も出来ないやうにしなければならない」、さらにデモクラシーの観点から、助教授、講師、学生にもある程度の権利を与えるべきと説く。

実はこの時期の阿部次郎には、大学の制度に対する関心が高まっていた。そもそも阿部や同世代の知識人は、高等遊民から大学教員に転ずる適齢期であり、彼の日記にはそれに関する葛藤が詳細に綴られている<sup>20</sup>。

満州から帰つて見ると慶応の時間は依然としてもとのまゝである。唯従来二年と三年とのみの合併級であつたものが、いつの間にか一年のBも加つてゐるだけである。昨年来の専任教授云々の相談について、澤木(曾根原注:美術史教授の澤木四方吉か)から何の挨拶もない。僕はかつがれたやうな気がする。恐らく森戸の事に対する僕の態度が慶応の人達をして余を危険がらせたのである。併しそれならばそれで結構だ。僕はいづれにしても教授になるために自分の享受してゐた自由を売る気はない。自分は自分で正しいと思ふ道を進んで行く。それでも僕が必要だと思つたら礼を正して迎へに来るがよい。迎へに来てくれなくても、僕は僕として生きて行くだけの自信はあるのである。<sup>21</sup>

1920年(大正9)3月に満州に渡り、『人格主義』の原型となる講演を済ませて帰国した頃、慶応大学の専任教授になるという話が進まないことに苛立つ姿がある<sup>22</sup>。さらに、その原因は「森戸の事」が影響しているとも考えられている。当時の阿部の、印税に頼った不安定な家計を考えるなら、その意味は決して軽くない。しかし阿部は、大学教授就職よりも「自分で正しいと思ふ道を進んで行く」ことを優先するという。

こうした葛藤の中で、大学のあるべき方向性について、考えが深まったらしい。

15 1920年(大正9)の吉野作造の日記には、「森戸問題につき朝日に投書」云々(1/12)、「森戸君の弁護の事につき懇談あり」(1/17)、「森戸問題につき来月十日大会を開くにつきての相談あり」(1/27)、「夜黎明会の例会ありて学士会に会す。森戸問題にて議論す」(2/1)などの記事や、公判関係の記録等が見られる(『吉野作造選集』14, 岩波書店, 1996年, pp.234-238)。

16 『阿部次郎全集』第6巻(角川書店, 1961年) p.210。

17 同前 p.200。

18 同前 p.214。

19 同前 p.216。

20 阿部の大学就職をめぐる動きについては、注2竹内著書に多くを学んだ。

21 「感想日記」「五月の分」。『阿部次郎全集』第14巻 p.368上。すでに『座談会大正文学史』(1965年)で勝本清一郎がこの箇所注目している。『座談会明治大正文学史(6)』(岩波現代文庫, 2000年) p.220。

22 その後の進展について、日記の1920年(大正9)6月10日条には、「慶応から教授会列席の資格を与へるという辞令が来てゐる(中略)慶応のことについて考ふ、法政大学とどつちがよいのかについて」、翌年5月10日条に「芝高輪の澤木へよりて慶応の本式の教授になれといふ相談を受く」とある。『阿部次郎全集』第14巻 p.337上, 同 p.401下。早稲田についても、大正5年10月29日の日記に記事がある。阿部は日本女子大学でも講義していた。

漱石全集校正会で野上白川に逢ったら、法政大学で両三年中新しい文科が出来るさうだ、大分僕をひつぱりたいやうな口振りである。もし僕にその新しい文科を組織させるならそれをやつて見たいやうな気がする。日本には新しい精神の文科大学が必要である。併し単に学科を分担する教授ならば何処にゐたつて同様である<sup>23</sup>。

慶応から教授会に列席せしむべき由の辞令が来た。専任教授の手つけのやうなものであらう。併し結局は外様で何も出来ないやうな気がする。僕のはしいのはプロフェッサーとしての仕事だ。法政で仕事をさせるなら其方がいゝやうにも思ふ。成行に任せて見よう。<sup>24</sup>

阿部次郎は、「新しい精神の文科大学」や「プロフェッサーとしての仕事」を志向するようになった。後者は「外様で何もできない」と対比されていることから、単に一人の教員として勤めるのではなく、組織を動かす立場を指していると考えてよいだろう。

そんな中で新たな動きとして、東北帝国大学に新設される法文学部への赴任話が持ち上がる。1921年(大正10)3月16日の日記に「京都の田辺より来書、東北大学美学担当のことにつきて内報あり」、4月2日「佐藤丑次郎氏より会見申込の手紙来る」、6月5日「夜佐藤丑次郎氏をたづねて東北行の話をきめる」と、話が進んだ<sup>25</sup>。佐藤は新設される法文学部の責任者だが、自らは法科出身であるため、文科の中心となる人材を求め、知人の田辺元を通じて阿部に接触を図った。阿部はそれを受け入れたうえで、自らに加え土居光知(6/29東北行承諾)など、組織づくりのための人材スカウト活動を始めている。

阿部次郎の仙台行は、「新しい精神の文科大学」や「プロフェッサーとしての仕事」を求めてのものだったと考えられる<sup>26</sup>。それは、直接的には森戸事件が負の影響を与えていたと見られる。そして、東京帝国大学のテイタラクを間近に実見する中で、一筋の希望を与えたのが第一高等学校長時代の狩野亨吉ではなかっただろうか。図式化すると、次のようになる。

**否定すべき組織：**上位者(総長さらには政府)の意に従い議論が出来ない、大学の独立を守れない(現実

の東京帝国大学)

**目指すべき組織：**立場を越えて率直な議論をし、学校の独立を守る(狩野校長時代の第一高等学校)

『人格主義』の記述は、森戸を守れない東京帝国大学の組織を反面教師とし「新しい精神」を求めた際に、モデルと成り得たのが狩野の思い出だったことを示しているのではないだろうか。そうであるなら、阿部の仙台行は、狩野に導かれたと考えることが出来るのかもしれない。

## おわりに

阿部次郎は1917年(大正6)11月に、次の文章を公開している。「自分は先生から一個の人格として取り扱はれてみた、自分は先生から思索に堪へる者として重んぜられてみた(中略)しかし自分は先生から特別に愛せられた者でも特別に親しまれた者でもなかつた。先生の門に出入りした者で恐らく自分ほど先生の愛と親しみとを知らずにしまつた者はないであらう。さうしてそれは九分九厘までは、孤独を愛する、人に一特に長者に一馴れ難い、可愛らし気のない自分の性格の責任である」<sup>27</sup>。

ここで「先生」と呼ばれているのは漱石であるが、相手にかかわらず「人に一特に長者に一馴れ難い」のが阿部次郎の性格であった。漱石よりも遥かに(おそらく)年少者が親しみにくい狩野に対し、阿部次郎のアプローチが限られたのは、あるいは無理もないことだったかもしれない。それでも、そこには漱石やケールや大塚保治に対するものとは異なる敬意と注目があつたのではないか。「狩野先生の注意の眼」を感じざるを得ない心境を、そのように理解してみたい。

狩野に対する想いとは別に、仙台に赴任して様々な実務に当たる中で、阿部の「プロフェッサーの仕事」観にも変化や展開があつたと予想される<sup>28</sup>。稿を改めて検討を試みたい。

※本稿はJSPS科研費17K02408, 18H03584の助成を受けたものです。

(そねはら さとし, 学術資源研究公開センター・史料館助教, 附属図書館協力研究員)

23 『阿部次郎全集』第14巻 p.368 下。

24 同前 p.370 上。

25 同前 p.395 上, p.397 上, p.404 下。

26 日記によると、阿部が初めて仙台を訪問したのは1919年(大正8)8月6日、帰省の途次だった。日記には「仙台は思つたよりいゝところ也」の文字がみられる(『阿部次郎全集』第14

巻 p.292 上)。なお「仙台の7年」(『阿部次郎全集』第10巻所収)も参照。

27 「夏目先生の談話」。『全集』第7巻(角川書店, 1961年) p.165。

28 その一端は「法文学部の思ひ出」(『阿部次郎全集』第17巻所収)など参照。